『人文学報』 第 98 号（2009年 12 月）
（京都大学人文科学研究所）

女神にひかれる男たち

── 現代の欧米の新しい宗教的実践におけるジェンダーについて ──

河　西　瑛里子*

1．序　　論

1－1　はじめに

1960 年代以降，ヨーロッパのプロテスタント諸国では，キリスト教の教会に通う人が減少する一方で，伝統的なキリスト教以外の信仰に関心をもち，実践する人が増加するという現象が生じている。このような信仰は総称して，オルタナティヴ宗教（alternative religion）とかオルタナティヴ・スピリチュアリティと呼ばれ，異端とされてきたキリスト教やヨーロッパ以外の地域を起源とする宗教に基づく信仰だけでなく，キリスト教が到来する以前のヨーロッパにあったとされる宗教に由来する信仰もみられる。本稿で取り上げる女神運動（Goddess movement）も，後者の一つである。

欧米の英語圏諸国を中心にみられる現代の女神運動は，1960 年代後半の女性解放運動の時代に，キリスト教の父権的な価値観に反発した北米の女性たちによって，女性の社会的地位の向上だけでなく，精神的な解放を目指して始まったとされる。近年ではアメリカに 50 万人，イギリスにも 11－12 万人の実践者がいると想定されている［Griffin 2000：14］。しかしながら，女神運動に関わる男性の実態は知られていない。そこで本稿では，イングランド南西部のグラストンベリーという町で始まった女神運動の実態について報告する。とりわけ，女性性を重視する宗教的実践における男性実践者の存在に注目し，男性が排除されているのではなく，むしろその存在が歓迎されていることと，男性実践者が女神および女神運動に関心をもつ背景が多様であることを示す。

* かわにし えりこ　京都大学大学院人間・環境学研究科

1－2　女神運動の成り立ち

現代の女神運動の実践の歴史の転換点の一つは，1951年にイギリスで魔女禁止令が廃止されたことである。これを境に，イギリスでは1950年代半ばごろから，魔女（witch）[1] を名乗る人々が少しずつ現れてきて，ネオペイガニズム（Neopaganism）という運動が起こる。実践者はネオペイガニズムを，魔女術（Witchcraft）やドルイド教（Druidry）[2] といった，キリスト教が到来する前にヨーロッパに存在していた，ケルト文化などの自然崇拝的な信仰への復興運動と位置づけている。魔女の存在を世間に知らせたとして有名なのが，現代魔女術の父と呼ばれるジェラルド・ガードナー（1884－1964）である。彼は，1939年，年老いたある魔女と出会い，消えかけていく魔女術の知恵を書物に残そうとした。このとき，彼のオカルト趣味と民俗学の知識が融合され，創られた新しい魔女術が現在，ウイッカ（Wicca）と呼ばれる，多数派の魔女術である。ウイッカは，現代の魔女の多数派を占めていて，実践者には都会の住人が多く，男性の姿もみられ，少人数の集団でおこなう儀式を重視する。英語圏で「魔女術」といえば一般的にはウイッカのことを指している。一方，民間療法やいわゆるおまじないに携わるヘッジウイッチと呼ばれる魔女もいる。ヘッジウイッチの大半は，田舎で暮らし，1人で活動している女性である。

ネオペイガニズムは1960年代，オカルトブームを背景に，主に書物を通じて北米に伝わる。ネオペイガニズムが伝わった頃，北米では第二波フェミニズムが勃興していた。ユダヤ＝キリスト教の女性軽視の姿勢を批判し，後に教会から離脱したディレイなどフェミニスト神学者の影響から，女性解放運動が盛りあがりをみせていたのだ。リューサーは，聖書を解釈しなおし，教会の内部からフェミニズムを推進しようとしたが［リューサー 1996（1983）］，クライストは，教会内部からのフェミニズムの展開に限界を感じ，ネオペイガニズムに興味をもつようになる［Christ and Plaskow 1979］。後者のようなフェミニストの目には，ネオペイガニズムにおける女神や魔女は，「女性の力の称賛」［Gordon 1995：9］とか「ヨーロッパの遺産における自立した女性」［Hutton 1999：341］と映った。女神や魔女は父権的なユダヤ＝キリスト教へ対抗するための格好の象徴だったのだ。

ネオペイガニズムに関心をもったフェミニストは，フェミニスト魔女（feminist witch）と呼ばれるようになる。スターホークは男性にとっての女神の必要性を訴えたが，ディレイは男性を邪悪な存在とみなし，ブダペストは女性だけの共同体の形成を目指す分離主義を主張した［Budapest 1989；Daly 1978；スターホーク 1994（1979）］。また，考古学者のギンブタスは，新石器時代のヨーロッパにあった女神を中心とする平和的な文化は父権的な文化をもつ侵入者に破壊されたという説を唱えた［ギンブタス 1989（1981）］。

このような，女神偏重で急進的な姿勢は，主流のネオペイガンには必ずしも歓迎されなかった。ネオペイガンは，フェミニスト魔女が男性と女性のエネルギーのバランスなど自分たちの

伝統を軽視しているとして不快感をあらわにしたのである。その結果，フェミニスト魔女術は1980年代後半からは，「女神のスピリチュアリティ（Goddess Spirituality）」とか，単に「女神（the Goddess）」と呼ばれるようになった［Hutton 1999: 355］。他にも女神崇拝／信仰（Goddess worship），女性の霊性運動（female spirituality movement），霊性フェミニズム（spiritual feminism）など様々な名称で呼ばれるが，近年では「女神運動」と呼ばれることが増えつつあるため［Bowman 2005; Griffin 2000; Rountree 2004; Salomonsen 2002］，本稿でも「女神運動」と記している[3]。

女神運動の実践者は，「大母（Great Mother）」という概念を提示したユング心理学や，女神を崇拝するという共通点をもつヒンドゥー教やネイティヴ・アメリカン文化に関心をもつようになる。また，女性の出産能力と大地の豊饒性を結びつけて，女神を自然の象徴とみなし，その自然を守ろうと環境運動や反核運動にも参加した。このようにして，女神運動はフェミニズムからもネオペイガニズムからも独立した一派を形成していったのである。

現代の女神への関心は，フェミニストのネオペイガニズムへの接近から始まったが，考え方の違いからネオペイガニズムと相容れることが難しく，女神運動という新しい運動を形成するに至ったとまとめることができる。

1－3．先行研究

女神運動が台頭したのは，神的存在が男性のイメージで語られるキリスト教に違和感を抱いていた欧米の女性たちにとって，女神の象徴は女性にも神的な力を認めている点が魅力的だったからだと説明されてきた［小松 2007，佐伯 1998］。ここでは，先行研究の問題点として，女神運動の担い手として女性だけが想定されてきたことを指摘する。

エラーは，女神運動の特徴として実践者が，自分たちの宗教は女性に活力をもたらすものであること，儀式は活力をもたらすための道具と聖なるものとのコミュニケーションの手段であるとみなしていること，歴史的にジェンダー関係がどのように構築されてきたか考えること，の三点を挙げている［Eller 1995（1993）: 3］。また，小松によると，「女神信仰という新しい宗教活動に参加している女性たちは，女神の復活を求め，古い象徴に新しい意味を付与し，自分たちなりの世界観や儀式を創造しようとする積極的な運動を展開している」［小松 2007：178］。つまり，エラーや小松は女神という女性的な神的存在の象徴を，ジェンダーを同じくする女性にとって有益なものだと暗示している。ニュージーランドにおける女神運動の実態を調査したラウンツリーも，女神運動の実践者は女性だと自明視し，調査対象を女性に限定している［Rountree 2004］。

佐伯も，女性のみを対象としたアメリカ人によるギリシャへの「女神巡礼」ツアーに参加し，そこで体験した儀礼は「女性が主宰し，女性のみが参加することに意義が認められている。そ

れは男性主導型のキリスト教の儀礼に対する批判や違和感から生まれ，女性の女性による女性のための救いと「癒し」を目的としている」と述べている［佐伯 1998：374］。ここでも，女神によって救われ，癒される対象は女性とされている。

田中は現代社会における女神崇拝にみられる典型的な主張を四点挙げているが，そのうちの三点は，1）古代には女神崇拝を中心とする，女性の地位が高い世界があった，2）フェミニズムを推進するうえで，女性には象徴としての女神が必要である，3）母を中心とする社会は理想的であり，父性の発見が女性の地位を低めた［田中 1998：7－9］であり，女性の地位の高さが主要な関心事となっている。最後の四点目は，人類学者プレストンが，エリアーデ監修の『宗教百科事典』に執筆した「女神崇拝」の項目に基づいていて，「ポスト産業社会に住む人々にとって，都市生活の寂しさ，自立の強調，技術社会における社会生活のペースの早さ，自然との断絶などからくる幻滅は，とくに母のイメージに代表されるような聖なる世界に戻ることで癒されると考える」［田中 1998：9］というプレストンの意見を紹介している。これは女性や男性といった実践者のジェンダーに偏らない，より一般的な立場からの主張だといえる。

このように，これまでの女神運動の研究では，女性実践者に焦点があてられる一方で，男性実践者に対する考察が欠けていた。プレストンにしても，ジェンダーの区別をしていないというだけで，男性に注目しているわけではないのである。

女神運動の出発点の一つが父権的なキリスト教からの女性の解放を目指すフェミニスト神学だったこと，女性だけのグループも存在していることから，一般的にも女神運動に携わっているのは女性だけだと想定されがちである。しかし，女神運動が始まった頃と比べると，女性を取り巻く社会状況も変化しているし，男性の参加を容認せずに，参加対象者を女性に制限すれば，運動の発展に限界をもたらすことになる。女神運動に大きな影響を与えてきたディレイは，1999 年男子学生の受講を拒否したため，ボストン大学から退職を求められた[4]。これは，急進的なフェミニズムが絶頂期を過ぎたことの一つの象徴である。また，小松は長年，女神崇拝について批判的な立場にあった，フェミニスト神学者のリューサーが 2006 年に出版した著書を分析し，彼女が女神崇拝に歩み寄る姿勢をみせていることを明らかにし，フェミニスト神学の限界も示唆している［小松 2006］。さらに，男性による女神探求の書籍も出版されている[5]。これらの理由からも，現在の女神運動と将来の女神運動の可能性について検討するためには，女神運動における男性に注目することは欠かせない。

本稿では，男性の参加者の割合が比較的高い女神運動の実態をフィールドワークに基づいて述べることで，女神運動と男性という問題について検討するとともに，現在，欧米で勃興しつつある新しい宗教的実践の一つについて，ジェンダーの視点から最新の報告をおこなうことを目的とする。

続く 2．では，調査地グラストンベリーの概要と当地における女神運動の位置づけを確認す

る。3．では，本女神運動の成立の背景と現在の様子を明らかにし，4．では，5人の男性参加者のライフストーリーを紹介する。続く5．ではこれまでの女神運動における男性の位置づけについて考察し，最後の6．では，結論を述べる。3．と4．は主に，グラストンベリーでの2005年11月と12月，2006年4月から9月，2008年7月から8月，2009年1月から8月の合計13ヶ月間，及びハンガリーの首都ブダペストでの2008年6月後半の10日間の文化人類学的な現地調査に基づいていて，調査方法としては参与観察と非構成的インタビューを併用した。

2．グラストンベリーという町

欧米諸国の中でもイングランドは，キリスト教徒の減少と，それに伴うオルタナティヴ宗教やオルタナティヴ・スピリチュアリティと呼ばれる実践に関心をもつ人の増加がもっとも顕著な国の一つである。イングランド南東部や大都市で盛んだが，本稿で取り上げるグラストンベリーは田舎町であるにもかかわらず，様々なオルタナティヴの実践がみられる町として知られている。

グラストンベリーはイギリス南西部サマーセット州に位置し，人口約9000人のうち，白人が98.5%を占めている［Census 2001］。過疎化が進んでいるわけではないが，失業率が高く，特に教育水準の低い若年層の失業や低賃金労働が問題となっている。この町は現在，欧米諸国の間ではニューエイジの聖地として広く知られている。

青山［1992］によると，当地には紀元前後からケルト系の人々が定住していたようだが，6世紀に大陸からアングロ＝サクソン人が到来する。それに伴ってカトリックが伝来し，修道院が造られた。中世，この修道院はイギリスで最も繁栄した修道院の一つであったため，町も繁栄を極めていた。しかし，16世紀の宗教改革の際，修道院は閉鎖され，町は急速に衰退していく。グラストンベリーへの再評価が起こったのは，産業革命の反動から自然への賛美とケルト文化への関心が高まった19世紀のことである。この時期，ドルイド，初期キリスト教[6]，アーサー王[7]，アヴァロン島（Isle of Avalon）[8]の伝説と結びついたグラストンベリーはロマン主義者をひきつけた。しかし，表面的にはまだ農業を主な産業とする一般的な田舎町だった。

その様相が大きく変化したのは1970年前後のことである。当時，イギリスの産業構造の変化に伴う農業の衰退と羊皮工場の撤退，隣町にあった靴工場の海外移転に伴い，失業問題が深刻化していた。そんな中，1970年に始まったグラストンベリー・フェスティヴァル[9]の影響を受けたヒッピーがこの地を訪れるようになっていた。さらに，物質主義やキリスト教といった，欧米に主流の文化に満足できず，オルタナティヴ（alternative）[10]，つまり精神的な事柄やニューエイジ的な思考にひかれた人々が訪れるようになり，1980年代からは移住者も出てき

た。新住人の多くが，空き店舗になり始めた町の中心部にニューエイジの店を開き，宿泊施設を始めたことにより，町は活気を取り戻し始めた。町の変貌を快く思わなかった旧住人もニューエイジ関連事業のもたらす経済効果を認め，2000年代に入ってからはニューエイジ関連の旅行者を積極的に誘致しなくても歓迎するようになっている。

現在，グラストンベリーは手軽にスピリチュアリティやニューエイジに接触できる町として知られている。町の中心部では，水晶やタロット，魔術に使う商品，ヨガや瞑想の道具，薬草や香などが売られていて，毎日，町のどこかで，ヒーリングや占いのワークショップが開かれている。アロマセラピーやマッサージなどの代替療法を体験することもできるし，ミステリー・サークルや巨石文化の愛好家が集う祭典も開かれている。

グラストンベリーでみられる宗教的活動も，この規模のイギリスの町にしては，多様性に富んでいるが[11]，お互いの間で目立った衝突はみられない。宗教的活動は，キリスト教多数派として英国国教会，メソジスト，合同改革教会[12]，カトリック，少数派として兄弟団（Brethren），コミュニティ・チャーチ（カリスマ刷新運動の一つ），エホバの証人，ケルト正教会[13]がある。オルタナティヴに分類される団体としては，ドルイド教とスーフィズム[14]の活動が盛んであること，クリシュナ意識国際協会（International Society for Krishna Consciousness）[15]，西洋仏教僧団友の会（Friends of Western Buddhist Order）[16]，チベット仏教のグループ，禅仏教のグループが小規模ながらも定期的に活動していること，マイトレヤ・モナステリー（Maitreya Monastery）[17]の寺院があることを確認している。

女神運動はオルタナティヴに含まれるのだが，催し物の大々的な宣伝や創始者の知名度の高さから，町ではオルタナティヴの代表的な団体とみなされている。英国国教会やメソジストなど多数派のキリスト教徒やオルタナティヴを自認する人々の大半からは，明るく礼儀正しいなどと評判はよく，他のオルタナティヴの団体に比べると一般的に好感度は高い。しかし，保守的なキリスト教徒の中には邪悪だとみなす人々もいるし，オルタナティヴの中にも，参加費が高すぎるかとか，男性性と女性性のバランスがとれていないとして，批判する人々もいる。

3．グラストンベリー女神運動[18]

1990年代にグラストンベリーで始まった女神運動は，イギリスで女神運動に関心をもつ人々の間ではよく知られている。北米大陸やオーストラリアなど，他の英語圏諸国やヨーロッパ大陸にも実践者がいるが，アングロ・サクソン系の白人がほとんどである。女性が多いが男性の姿も常に1－4割はみられ，儀式の際に重要な役割を任されることもある。年代別では40代や50代が多い一方，70代以上の人をみかけることは稀である。学士号や修士号を取得している高学歴者，中流階級以上の家庭の出身者が多いのも特徴的である。本業または副業でヒー

リングや代替療法に従事している者が多い。環境問題への関心が高く，菜食主義者も少なくない。男性参加者の割合が他の女神運動より多いことを除けば，参加者の属性は，一般的な女神運動の参加者の属性と大差ない。

本章では，創始者ジョーンズのライフヒストリーと主張及び活動内容から，グラストンベリーでの女神運動の成立の背景と現在の様子を明らかにする。なお3－1．と3－2．は，2008年7月に実施したジョーンズへのインタビューと［Jones 1996；2000；2001（1991）；2006］に基づいている。

3－1．ジョーンズのライフヒストリー

キャシー・ジョーンズは，1947年ニューカッスル近郊の町で生まれた。高校卒業後はノッティンガム大学に進学し，心理学と生理学を専攻している。当時は対抗文化運動が盛りあがっていた時期であり，彼女も時代の流れに乗って，1968年に大学を卒業するとロンドンに向かう。出版社やデザイン会社で働いたあと，英国放送協会（BBC）の科学系ドキュメンタリーの制作に携わる研究員の職に就く。このロンドン滞在の時期に，スピリチュアルな事柄への関心を徐々に深めていった。

1971年，仕事を辞め，簡素な暮らしを始めようとウェールズの田舎に移住し，単身で自給自足生活を始めた。ウェールズには1977年まで滞在していたのだが，ジョーンズは当時を振り返って，「スピリチュアルな事柄を探求していた時期だった」と話す。毎日，数時間瞑想をし，スピリチュアルな書物を手当たり次第に読んで暮らしていた。とりわけ，神秘主義者アリス・ベイリー（1880－1949）にひきつけられていて，彼女の思想に基づいたエソテリック・ヒーリング[19]を習得している。

ジョーンズがグラストンベリーとの関わりを深めていったのもこの時期だった。グラストンベリー近郊に暮らす大学時代の友人夫妻が始めたグラストンベリーでの満月の夜の瞑想会に参加するようになったためである。その1年半後，友人夫妻を含む数人とともに，グラストンベリーに移住した彼女は，ヒーラーとして働く傍ら，「女性の意識向上グループ」を結成し，様々な女性問題について定期的に議論を重ねていた。このような集まりは，当時のアメリカやイギリスでよくみられたものだった。その後彼女は，秘儀的な（esoteric）書籍を集めた図書館やヒーリング・センターの設立などに携わり，グラストンベリーのオルタナティヴ派の中心的存在の1人となっていく。また，移住後に結婚して，2人の子供をもうけたが，数年後には離婚している。

ジョーンズが女神運動に関わる直接のきっかけになったのは，イングランド南部のグレナム・カモン基地で起こった反核運動だった。当時，アメリカが同基地への核ミサイルの配備を計画していたため，1981年の夏から女性を中心とした反核運動が始まっていて，ジョーンズ

も幼い子供の未来を危惧して参加したのだった。翌年も抗議運動に参加した彼女は，この運動を世間に知らせるようと，劇の脚本の執筆を決意する。古代ギリシャの女神の神話を土台にしたこの劇は，その年のうちにグラストンベリーで上演され，好評を博した。ジョーンズが女神の神話を土台に用いた背景には，グレナム・カモン基地で反核運動を続ける人々の間で，女神運動への関心が高まっていたことが関係している。

子育てと家事だけで毎日を過ごしたくないという思いもあり，ジョーンズはこの年以降，1996年まで断続的に脚本を執筆し劇を上演していくのだが，彼女の関心は次第に女神自体に移っていく。ジョーンズは脚本について，「女神が誰だか思い出させるために，父権的な神話を書き直したの。いろんな文化からの神話を融合させたのよ」と語る。つまり，当初は反核運動を支援する手段として女神の神話を利用していたのだが，後には神話を女神の視点から書き直すことで，忘れられた女神文化の復興を試みたのである。

1989年，劇の上演を通して知りあったミュージシャンの男性と再婚する。彼の勧めで，ウェールズの伝承物語マビノギオンを読んだことをきっかけに，自国の古代の女神に興味を抱くようになり，イギリスの神話や遺跡の調査を始める。これ以後に執筆された脚本では，外国の神話とイギリスの神話を融合させて，新しい女神の神話を生み出そうとしている様子が伺える。

この頃から，画家や詩人と共に「女神の展覧会」を開いたり，作家や講演者を招いて「女神の日」を開いたりするようになる。しかし1993年，もっと大規模な「女神カンファレンス」の開催という考えを女神から受け取り，計画を立て始める。1996年，女神に関心をもつ友人と共に第1回グラストンベリー女神カンファレンス（Glastonbury Goddess Conference，以下女神カンファレンス）を開催した。これを境にしてグラストンベリーでの女神運動は多くの人に知られるようになっていく。子供に手がかからなくなり始めたこともあり，これ以後は後述するグラストンベリー女神神殿（Glastonbury Goddess Temple，以下女神神殿）[20] や司祭訓練（Priest/ess Training），女神関係の本の執筆やワークショップの開催など女神を広める活動に精力的に取り組んでいくことになる。

3－2．ジョーンズの主張

ジョーンズの女神に関する主張には，一般的な女神運動の主張との共通点が多くあり，彼女自身，ディレイやスターホーク，ギンブタスなど，多くの女神活動家から影響を受けていると言う。共通する主張としては，1）父権的な文化の下に隠された，新石器時代の女神の文化を神話や遺跡をもとに再発見する必要がある，2）女神は複数の名前をもつが，それらは全て一つの女性的なエネルギーである，が挙げられる。

女神活動家によって見解が異なる男性と女神についてジョーンズは，女神を崇拝することは男性の排除を意味するのではなく，むしろ包括的な実践だと考えている。彼女が女神のみの崇

拝を主張するのは，これまで男神（God）のみが崇拝されてきた結果，女性性と男性性のエネルギーのバランスが崩れ，世界中に混沌をもたらしているからである。現在崩れているバランスを回復させるためには女神のみを崇拝する必要があり，バランスが戻れば彼女も両方の神を崇拝すると述べている。

さらに，女神はどの文化にもいると主張し，とりわけイギリスの女神に注目している。女神運動では一般的に，ケルトやインドの女神も取りあげるものの，ギリシャやトルコなどの地中海文化の女神が中心的位置を占める。それに対して，ジョーンズは外国ではなく自国の文化に女神を求めたのである。以下，ジョーンズに特有の女神の主張について，グラストンベリーの地形とのつながりと女神体系という点からみていく。

ジョーンズによると，グラストンベリーの地形的特色は女神の身体を表している[21]。この土地の地形を母なる女神に見立てたのである［Jones 2000：20］。つまり，円錐形に隆起している三つの丘をそれぞれ女神の頭，胸，妊娠中の腹に，二つの細長い丘を両足に見立て，細長い丘の先にあるブライド塚（Bride's Mound）と呼ばれる場所は赤ん坊の女神ブライドとした（図1）。また，処女の象徴とされる白鳥に，年老いた女神（Crone）が乗っているという見方もある［Jones 2000：16］。ここでも，それぞれの丘が年老いた女神の頭，胸，子宮，白鳥の首とされている（図2）。つまり，グラストンベリーという土地そのものを，女神の聖地とみなしたのである。

さらに，「ブリタニアの輪（Britannia's Wheel）」[22]という女神体系も提示する（図3）。この女神体系では，方角と季節や要素が対応させられているだけでなく，8方角に中央を加えた九

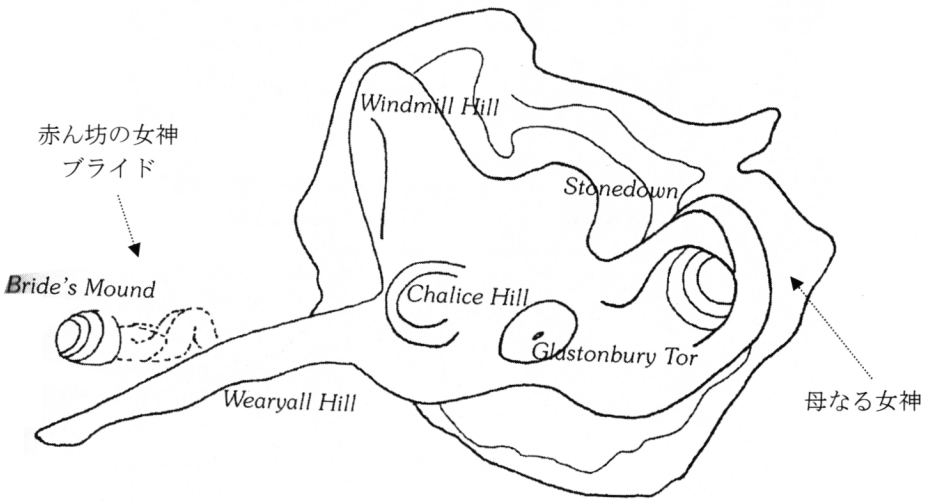

図1　グラストンベリーの地形と母なる女神［Jones 2001：48］（矢印は筆者が加筆）

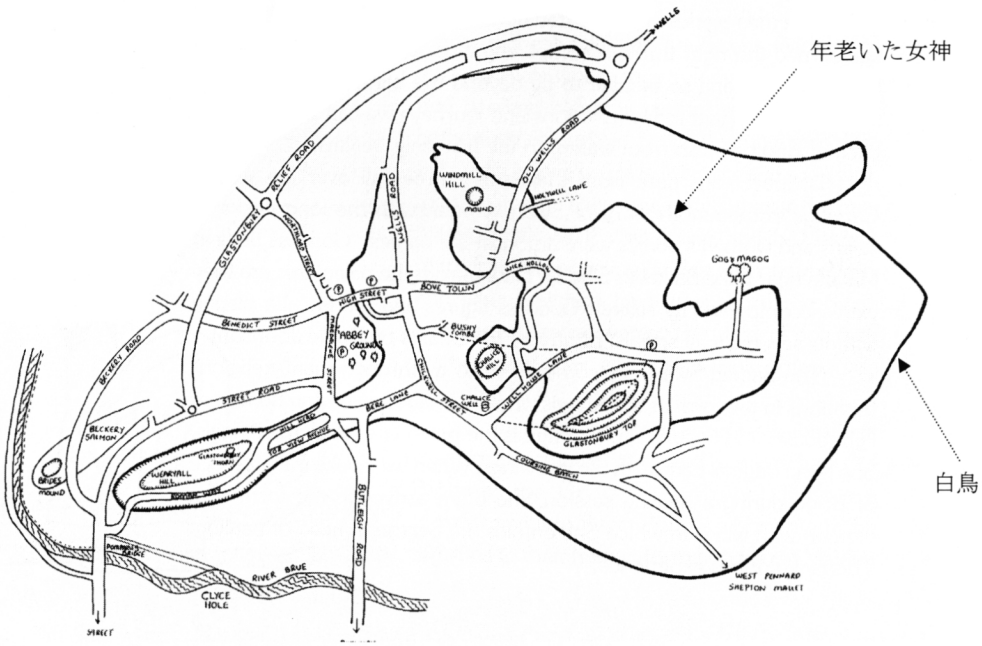

図2　グラストンベリーの地形と白鳥に乗った年老いた女神［Jones 2001 : 125］（矢印は筆者が加筆）

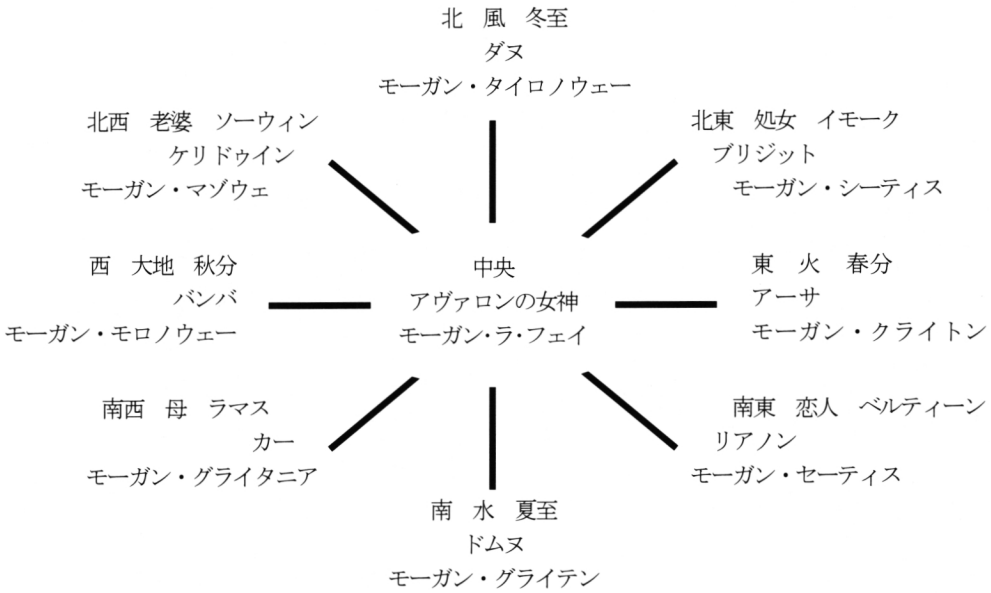

図3　ブリタニアの輪（［Jones 2001 : 35］の図を一部改変）

つにそれぞれ9人のイギリスの女神と9人のモーガンが配置されている。9人のモーガンとはアーサー王伝説の登場人物で，12世紀の詩人ジェフリー・オヴ・モンマスの著書の中で，グラストンベリーと重なり合っているといわれる伝説の島アヴァロンを統治する女司祭として紹介されている。ジョーンズはアヴァロンの統治者ということから，9人のモーガンをアヴァロンの女神とみなし，そこからグラストンベリーという土地の女神と位置づけている。

3－3．具体的な活動の内容

グラストンベリー女神運動の活動は，日常的に開放されているグラストンベリー女神神殿，年に一度の祭典であるグラストンベリー女神カンファレンス，そして女神についての講座である司祭訓練の三つに分けられる。

女神神殿とは，2002年に設立された女神を祀る場所なのだが，このような場所を設ける女神運動は珍しい。これは町の中心部の一画に建つ建物の2階にある30畳ほどの部屋だが，ユダヤ教のシナゴーグやイスラームのモスクのように，政府から宗教的崇拝の場所として公式に認可されている。周囲にはハーブ専門店，ニューエイジ・グッズの土産物店，ニューエイジ関係の書籍を中心とする古書店，ベジタリアン・カフェなどが軒を連ねていて，観光客でにぎわっている。

階段を登り，女神神殿に入ろうとすると，その扉に『土足厳禁』という掲示があることに気づく。靴を脱いで中に入る。部屋の中央の床には，4方角に4要素を象徴する物が置かれた小さな祭壇がある。一方の奥には等身大の女神の絵が飾られていて，その下の祭壇には大きさも姿形も様々な女神の像が置かれている。訪問者はろうそくに火をつけ，祭壇に捧げることができる。もう一方には，9人のモーガンをあらわす等身大の柳製の人形が9体，円形に並んでいる。

女神神殿には毎日ボランティアが常駐していて，誰でも無料で訪れることができ，定期的な催し物としては，年8回の季節の祝祭と新月のヒーリングがある。「女神神殿ができる前は，一時的に部屋を借りて季節の祝祭をおこなっていたので，いつでも女神を祝福できる場を設けたことは画期的だった」とジョーンズは話す。2006年からはさらに活動を広げていくため，女神神殿の運営規模の拡大が決定され，出産や看取りの場所を備えた女神会館（Goddess Hall）の設立を目指すことになる。不動産の購入と収入源確保のため，女神神殿はジョーンズ他，グラストンベリー女神運動の熱心な実践者を中心に理事を選出し，非営利組織として登録された。2008年6月には英国国教会に付属する公民館だった建物を購入し，同年11月に開館した。2009年4月現在，この会館は祝祭のときにのみ，一般開放され，それ以外のときには踊りや演劇など，主に芸術関連の様々なワークショップに貸し出されている。

女神カンファレンスは毎年，8月の初めに開催される5日間の催し物で，参加費は200～

245ポンド[23]である。初めの頃の参加人数は100人ほどだったが，2008年には300人を超した。これは学術的な会議ではなく，女神に関心のある人を対象にした女神に関する祭典で，女神に関する講演やワークショップのほかに，仮装パーティやキャンプファイヤーなどがおこなわれる。とりわけ町の中心部から郊外の丘，グラストンベリー・トールへの行進は，色とりどりの衣装に身を包んだ人々が，鮮やかな女神ののぼりをもって，女神の歌を歌いながら町中を歩くので，グラストンベリーの夏の変わった風物詩として知られている。

司祭訓練とは女神についてより深く体系的に学ぶための3年間の講座で1998年に始まった。これは，女神に関するカルチャー・コースのようなもので，ジョーンズの著書をもとに女神について学んでいく。始めたきっかけについてジョーンズは，「ある人が司祭訓練をやっていることを聞き，私も女神に関する講演やワークショップを開いていたので，自分にもできると思った」と話す。講座は彼女の女神の調査や，講演やワークショップの経験をもとに考案されたもので，机上で学ぶだけではなく，瞑想や儀式の創造など実践的な訓練もおこなう。始めてみると，値段の手ごろさもあり，多くの人が集まった。そこで継続的に訓練をおこなうことになった。当初は1年間で終了していたが，現在では，1年間単位で受講できるものの，終了には3年間を要することになっている。3年間のコースを終えたあと，発展コースとして，さらに2年間学ぶこともできる。現在，1年目と2年目は初期の受講生だった女性が指導していて，ジョーンズが直接指導するのは3年目以降である。1年目は女神や季節について学び，2年目は儀式のやり方や占いなど司祭としての技術を学ぶ。3年目はアヴァロンの女神との関係を深めていくための精神的な訓練をする。1年目と2年目は8回，3年目は4回，グラストンベリーで開講され，費用は1年目と2年目が800ポンド，3年目が400ポンドかかる。毎年15人ほどが受講していて，これまでに100人以上が受講した。受講生や受講終了生に対する決まった特典や義務はないが，ジョーンズや別の司祭に頼まれて，または自発的に季節の祝祭や女神カンファレンスを手伝う者もいる。ただし，未受講生が手伝うこともある。

4．グラストンベリー女神運動にかかわる男性の諸相

本章では，この女神運動にかかわりをもった5人の男性のライフストーリーについて，特に女神との関係に注目しながらみていく。それぞれのライフストーリーを構成するもととなる情報は，表1のように収集した。なお，5人の中でエドは同性愛者であるが，それ以外の4人は異性愛者であり，性的にはマジョリティに属す。5人の名前はすべて仮名である。

表1　インタビュー状況の詳細

エド	・エドがグラストンベリーを訪れた2008年8月及び2009年8月に交わした会話。 ・2008年8月に知り合ってからの断続的な電子メールのやり取り。 ・2009年6月と7月のロンドンでの会話。
ホセ	・ホセがグラストンベリーを訪れた2006年8月に交わした会話。 ・2006年8月に知り合ってからの断続的な電子メールのやり取り。 ・2009年9月のマドリードでの会話。
ジョン	・2006年6月に知り合ってから交わした断続的な日常会話。 ・2009年3月のグラストンベリーでのインタビュー（彼の妻も同席）。
ビル	・2006年7月に知り合ってから交わした断続的な日常会話と電子メールのやり取り。 ・2008年8月に受け取った電子メール（筆者はビルへのインタビューを申し込んだが，体調が優れないため，電子メールでのやり取りにしてほしいとの返事があった）。
マーク	・2006年7月のグラストンベリーでのインタビュー。 ・2008年6月のブダペストでの会話。 ・2008年7月～2009年4月の本人のブログ。

4－1．エドの場合（イギリス人。2009年8月現在，26歳）

ロンドン郊外のエセックス州の大学で政治学と哲学を学んだエドは，ゲイであることを公言している。現在は，ロンドンで母親と2人で暮らしながら，働いている。彼は19歳のとき，ドルイドとして生きることを決めた。2006年からは，ロンドンを拠点とするあるネオペイガンのグループに属し，仲間たちと季節ごとに祝祭をおこなっている。これは，男女混合のネオペイガンのグループで，参加者の年齢層も20代から50代までと幅広い。以前は閉鎖的だったが，現在はメンバー以外の人々の祝祭への参加を認めるなどオープンになってきている。また，このグループのリーダーが，全英規模で活動しているあるネオペイガン団体のロンドン支部長を務めているため，エドはこちらのイベントにも定期的に参加している。それ以外にも，ロンドンを中心に，日常的に様々なネオペイガンのイベントに顔を出している。さらに，ソーシャル・ネットワーク・サービス（SNS）を通じた，ネオペイガンの活動にも熱心に取り組んでいる。また，日本の漫画にも関心が高く，ネオペイガニズム的な感じがするウルフズレインという漫画をとても気に入っている。

グラストンベリーには2008年の夏に，女神カンファレンスに参加するため，初めてやってきた。滞在中は宿泊費を節約するため，近隣の友人の家に滞在したり，キャンプをしたりしていた。このカンファレンスは，ロンドンのネオペイガンのイベントへの参加を通して知り，興味をもった。「グラストンベリーの女神カンファレンスは，ロンドンでもよく宣伝されているよ」と言う。

女神カンファレンスの開会の儀式が始まる前，「今週は，ロンドンのいろいろなグループで，祝祭が開かれているので，それに参加できないのは少し残念。でも，このカンファレンスはとてもエネルギッシュなので，楽しみにしているんだ」と話していた。

4－2．ホセの場合（スペイン人。2009年9月現在，27歳）

スペインの首都，マドリードの大学で心理学を専攻したホセは，タロットを得意とするネオペイガンである。両親と弟，中東で働く兄の5人家族で，子供時代の合計6年間をアメリカ合衆国で過ごした帰国子女である。母親はキリスト教徒だが，父親は無神論者で，いずれもネオペイガンではない。しかし，ホセが家族で冬至を祝うことを提案すると積極的に参加するなど，彼がネオペイガンであることに理解を示している。

ホセは，男性唯一神しか認めず，その神が世界の全てを支配しているというキリスト教の世界観に違和感を抱いている。また，キリスト教はペイガニズムなどのヨーロッパ大陸にもともとあった古い文化を信じる人々を強制的に改宗させてきたとして批判する。彼は日本文化にも強い関心を寄せているのだが，日本ではキリスト教徒の割合が少ないことを，「伝統的なスピリチュアリティに対する強い意識がまだ残っていると聞いて嬉しいよ」と述べる。また，男性中心的な感じのする仏教より，アマテラスなど多数の女神がいて，アニミズムの要素が強い神道により魅力を感じている。

男神のみを重視するキリスト教になじめないホセは，10代後半から男神と女神を崇めるネオペイガニズム，とりわけウイッカにひかれていく。2006年，インターネットで女神カンファレンスを見つけ，恋人と参加したのだが，女神カンファレンスが興味深かった理由として，「男性の神的存在と女性の神的存在がいることを信じている多くの人々の再結合だったから」と述べている。彼は女神信仰とは，母なる自然への信仰であり，それはキリスト教がやってくる以前の全ヨーロッパにあった大地に根ざした信仰であり，ネオペイガニズムの一つであると捉えている。また，女神運動に携わる人々の大半は，強烈なフェミニストだが，自分は男性なので，彼女たちより中立的な意見をもっていると考えている。

ホセは，日常的にはマドリードでネオペイガニズムを実践しているが，2006年の女神カンファレンス以外に，グラストンベリー女神運動の活動には参加していない。これは，女神カンファレンスに不満があったというわけではなく，毎年参加するには費用がかかりすぎるからである。また，他のネオペイガニズムの催し物にも関心があり，2008年にはイギリスのストーンヘンジでの夏至の祝祭に参加している。

4－3．ジョンの場合（イギリス人。2009年3月現在，40代半ば）

ジョンは，スコットランド最大の都市グラスゴーの郊外で育った。両親は聖書を読むような熱心なキリスト教徒ではなく，子供の頃の宗教的実践といえば，スコットランド合同自由教会(United Free Church of Scotland)[24] に一年に二回ぐらい連れて行かれた程度だった。成人後，グラスゴー中心部にも数年間暮らしていたが，スコットランドを離れたくて，スイスで仕事を見つけ移住する。その後しばらくしてドイツに移り，20年以上暮らし，結婚して，2人の子

供をもうけるが，その後離婚した。両親は既に亡くなり，兄弟もスイスに住んでいるため，スコットランドに帰る理由がなく，10年は帰っていない。

ドイツに住んでいた2004年，ジョーンズのエソテリック・ソール・ヒーリング（Esoteric Soul Healing）のコースを知り，一年に6回，ドイツからグラストンベリーに通い，ヒーリングを習得した。その後，2005年からは司祭訓練を受講し，2008年に3年間の課程を終えて，司祭になった。その間に，司祭訓練の同期生だったブリストル出身で看護士の女性と再婚し，グラスントベリーに移り住む。2007年からは女神神殿も入っている建物の管理人をしている。そのため，女神神殿でのヒーリングのイベントや模様替えのときには，ジョーンズから手伝いを頼まれることも多い。

ジョンによると，司祭訓練には，ネオペイガニズムをすでに習得している人が受講することも多い。しかしこの訓練では，用いられる象徴が一般的なネオペイガニズムとは異なり，ジョーンズがイギリスの伝統を基本として，直感に従って新しく創った象徴なので，混乱する人もいる。司祭訓練の期間に，新しい象徴に慣れるように変化することを求められるが，ネオペイガニズムを長年実践してきた人は受け入れることが難しく感じる。しかし，ジョンも妻もネオペイガニズムを学んだことがなかったため，特に困難を覚えることはなかった。ジョンの妻は「（ジョーンズの）司祭訓練は独特なところにひかれたわ。ブリテンの神々や歴史にひかれたの」と話す。ジョンも妻の意見に同意し，「僕は（ジョーンズの体系のほうがネオペイガニズムの体系より）論理的で明確だとも思った」と付け足した。

4－4．ビルの場合（イギリス人。2008年8月現在，70歳ぐらい）

ロンドンに育ったビルは，子供の頃，ロンドン大空襲に遭った。彼の父親は当時，消防士で，空襲の後，消火に奔走する父親の姿をおぼろげながらに記憶している。高校卒業後，軍人になったビルは，ヨーロッパ，アメリカ，東南アジア，南太平洋と世界各地に赴任した。軍人時代にはかなり危険な目に遭ったこともあり，とりわけ南太平洋のクリスマス島でサリンガスの人体実験に参加させられたことは，現在，彼の健康が優れない要因の一つになっている。また，1970年代から1980年代には，対抗文化運動への従事者やニューエイジャーによるデモを，国の平穏を乱す脅威として鎮圧したこともあった。

クリスマス島にいた頃，よく6歳のときに亡くなった祖母のことを，南十字星を見上げながら，思い出していた。彼女を近くに感じ，彼女の愛に触れたことが，ビルが「スピリチュアル」になった初めての体験だった。

1980年代後半に除隊したビルは，妻とともにロンドンの西部のウェストバークシャー州に落ち着く。2人の子供はすでに独立して家を出ていた。ビルはこの頃，熱心に英国国教会の教会に通い，聖書を学んでいた。しかし，キリスト教の教会を支配するのが男性だけで，女性が

従属的な地位に押しやられていることが正しいとは思えなかった。また，イエス・キリストがそのように指示したとも考えられなかった。当時，ようやく英国国教会でも女性が牧師職に就くことが認められるようになったのだが，ビルはこの出来事を自分が知る限り，英国国教会で起こったもっともすばらしいことだと評している。

1998年，31年間連れ添ってきた妻と離婚する。そのあと，別の町に移り，ある女性と4年間同棲するが，関係は泥沼化し，別れることになった。その直後，グラストンベリーに移住することを決め，2003年からずっとグラストンベリー近郊の小さな村で暮らしている。

彼がグラストンベリーを初めて訪れたのは，2000年の秋だった。そのときは4日間だけの滞在だったが，見知らぬ多くの人々とスピリチュアルな事柄について語り合うことができ，元軍人だった自分でさえ，町で出会った人々がありのままに受け入れてくれることに喜びを覚えた。故郷に帰ったような気さえしたと述べている。それからも繰り返しこの町を訪れていたが，2002年の夏に設立されたばかりの女神神殿を見つける。キリスト教に違和感をもつようになっていたビルは，キリスト教の男性優位主義とは異なり，女性の力を称賛するような考え方が公にされていることに，強い印象を受けたのだった。そこで，その年の女神神殿の冬至の祝祭に参加してみた。「全ての女性と数人の男性がめかしこんで，各方角の女神を呼んでいるのが印象的で，これが探し求めていたものだってわかったんだ」とそのときの印象を述べる。

女神神殿を通して，ジョーンズをはじめとする多数の人々と知り合っていたため，2003年に引っ越してきても沢山の友人がいて，かえって帰郷したかのような安らぎを覚えたのだった。移住後，ビルは女神神殿でのボランティアを始める。軍隊で消防士としての訓練も積んでいた彼に，ジョーンズは女神神殿の火元責任者となることを頼む。子供の頃の空襲体験から，防火活動への思い入れが人一倍強いビルは，自分の経歴が生かせるならと引き受けた。ただ，女神カンファレンスは楽しそうだが，自分には向いていないと思い，参加したことはない。

ビルにとって女神はキリストに匹敵するものであり，女神信仰はネオペイガニズムに基づくと考えている。女神運動にかかわる男性の中には，非男性化（emasculate）していく者もいるが，自分はそうではないとも述べている。

女神神殿でのボランティアと火元責任者の職に満足して，女神神殿を訪れる人々との交流を楽しみながら暮らしていたビルだったが，女神神殿の運営方針の転換に伴い，2008年の冬に両方を引退することになる。それまで防火に関することは専門家であるビルに一任されていたのだが，当時の運営会議で，防火活動も含め，女神神殿にかかわるあらゆることに対して，女神神殿の理事の許可を得ることが必要になり，そのことにビルは納得できなかったからである。しかし現在でも彼は，ときどきは女神神殿に遊びにいき，友達とのおしゃべりをしたり，女神を崇拝したりする形でグラストンベリー女神運動とのつながりを保持している。

4－5．マークの場合（イギリス人。2008年6月現在，61歳）

グラストンベリー女神運動で長年主要な役割を果たしてきたマークは，2006年12月にグラストンベリーを離れ，現在はハンガリーの首都ブダペストに住んでいる。

マークはイングランド中部で生まれ育った。子供のころは時々，英国国教会の日曜学校に行く程度で，毎週日曜日に教会に行くことはなかった。彼の母親は16歳のとき，かなり年上の男性と結婚し，翌年マークの兄を出産した。しかし，マークが11歳のとき，母親が10歳も年下の男性と恋に落ちたため，両親は離婚し，弟が生まれた。母親が父親以外の男性を愛していると知ったことは，少年だったマークに大きなショックを与えた。

16歳の時，スピリチュアリティの探求を始めたマークは，まずカトリックに改宗した。しばらくはそれで満足できたが，次第に合わないと思うようになり，仏教を学んだ。しかし，女性を排除したり，女性を不浄だとみなしたりしていて，男性的すぎる点，外国的すぎる点になじめなかった。

グラストンベリーのことを初めて聞いたのは，図書館で働いていた20代前半のことだった。あるニューエイジ系の雑誌にグラストンベリー・トールが，「女神のランドスケープの女陰」であると載っていたのである。それまで，彼にとっての女神とは，ギリシャやローマの単なる物語の中の存在だったが，この全く新しい概念を知ってから，女神が生き生きとした存在になった。「女神は女性的で，よりイングランド的だから，仏教より受け入れやすかった」とも語る。そして，女性のセクシュアリティを肯定する女神運動の主張と自分の女性に対する考え方が合致していたため，そのときから女神運動に関わっていくようになる。「人はみな，女性から生まれたんだから，女神は男性も受け入れてくれると思っているよ」と話す。マークにとって，グラストンベリーと女神は分かちがたく結びついていたが，実際にこの町を訪れたのは，この出来事から25年後のことだった。初めの訪問の後，繰り返しグラストンベリーを訪れるうちに，二度目の妻と移住することを決めた。その間に，グレナム・カモンでの平和運動に加わっているが，「このときに初めて男性も女神運動に加わることを許されたんだ」と語る。

2000年ごろ，初めに妻がジョーンズの司祭訓練を受講し，次いでマークも受講する。訓練を終えた頃は，受講生の数が増えてきたため，ジョーンズ1人で訓練を行うのが難しくなっていた時期でもあり，マークもジョーンズとともに司祭訓練の講師を務めることになった。

ジョーンズとともに女神神殿の創設を目指していた頃，彼は通りで男性から呼び止められ，「なんで男神も入れないんだ？」と詰問されたことが何度もあった。そんなとき彼はいつも，「ここが女神神殿だからだ。男神も入れた神殿がほしければ自分で創ればいい。誰も止めはしない」と返事をしていた。すると相手はたいてい，女神と男神，陰陽など，女性性と男性性のバランスをとることの重要性について語り出した。しかしながら，そんなときマークが感じたのは，男神の排除を男性への直接的な侮辱であり，男性であるマークは自分たちの性に対する

裏切り者だと相手が考えているのではないかということだった。

2005年，1人のハンガリー人女性が司祭訓練を受講し，マークの生徒となる。この年，彼女はブダペストでも女神カンファレンスと同様の祭りを開くことを計画していて，マークは「男性のための女神」についての講演を頼まれ，初めてブダペストを訪れた。そこで，古代シュメールのイナンナ（Inanna）という女神との強いつながりを感じ，彼女に呼ばれているような気がした。その頃，妻との関係がうまくいっておらず，またジョーンズとも司祭訓練のやり方を巡って見解が分かれ始めていた。このように親しい人々との間で，人間関係のこじれがあり，グラストンベリーを離れることを考え始める。そこで，ハンガリー人女性がブダペストでハンガリー人向けに始めた司祭訓練を手伝うことにし，妻と別居して，ブダペストに移住した。現在は，司祭訓練の講師を務めたり，セラピーやタロットをしたりするだけでなく，企業で英語も教えている。別居中の妻ではなく，最初の妻との間に30代の息子が2人いるが，ほとんど連絡を取っていない。現在，ハンガリー人の恋人と暮らしていて，イギリスに戻る予定はないと言う。

マークは最近，男性性（masculinity）について，ブログの中で以下のようなことを語っている。「生命が誕生する営みから排除されているという感覚に対し，自分たち男性は恐れと怒りを感じることがある。それゆえに，新しい男性性は，女性にとって血を流すのは出産のときだが，男性にとっては戦いのときだという違いを説明し，男性のこの違いへの感情を正直に見なくてはならない。つまり，男性は子供が生まれ，育っていくことを感じるのではなく，観察しなくてはならないのだ。生物学は運命である。フロイトとは逆に，男性の子宮への憧れは生物学的に決定されたものであり，ペニスに付与された特権は文化的なものである。男性性をどのように定義しようとも，女神神殿で男神を祀ることの推進にはつながらない」。

5．考　　察

5－1．創始者の男性と女神についての考え方

本節では，創始者ジョーンズの男性と女神に対する考え方を中心に，この女神運動における男性の位置づけを考えていく。ジョーンズは，これまでの伝統的な信仰，つまりキリスト教，では男神のみが崇拝されてきたため，現在の世の中には男性性のエネルギーが強くなり，その結果，戦争や飢餓などの不幸な出来事が生じていると考えている。これを解決するには，女性性のエネルギーを高め，女性性と男性性のエネルギーのバランスを取り戻す必要があると主張する。そのため，季節の祝祭や女神カンファレンスでは女神のみを崇拝し，男神の姿はみられない。他の女神活動家とは異なる彼女の特有の主張として，グラストンベリーを女神の聖地と見立てたことと，ブリタニアの輪というイギリスの神話に基づいた体系を創りあげたことが挙

げられるが，どちらにも男神の姿は全くみられず，男神は彼女の推進する女神運動から排除されているといえる。

しかしながら，彼女は男性が女神を崇拝することは否定せず，グラストンベリー女神運動の一連の活動において，男性が参加を制限される機会はほとんどない[25]。むしろ男性参加者を歓迎し，この女神運動に男性がいることを強調している。

2006年の女神カンファレンスのとき，英国放送協会（BBC）が取材にやってきた。そのインタビューの中で，グラストンベリー女神運動のスポークスマン的役割を果たしている女性司祭は次のように述べている。

> これは父権的な宗教ではありませんし，ストライキでもありません。（中略）単なる女性的な神性の信仰，エンパワーです。（中略）ストライキではありません，男性に対するフェミニスト運動でもありません。女神を崇拝する男性を歓迎します。男性も沢山加わっています。今では，女性司祭だけではなく，男性司祭も増えています。すばらしいことですよね。女神崇拝の中には純粋に女性だけというグループもあります。（中略）けれど私たちのはそうではありません。私たちは男性にも女性にもオープンです。［BBC homepage］

彼女は自分たちの実践している女神運動がフェミニズム運動ではないこと，男性を歓迎していることを強調している。

また女神カンファレンスでは，最終日に開催期間中ずっと飾られていた柳製の女神人形とともに，郊外の丘まで行進するのだが，この人形を担いでいるのは男性である。この人形は重いので，女性が担ぐのは難しいという事情もあるが，ジョーンズは自著に女神人形を担ぐ男性の写真を掲載している［Jones 2001］。また，女神カンファレンスなので，女性が中心的な役割を果たすと考えていたある女性参加者は，「象徴である女神を男性が担いでいて，びっくりした」と驚きつつも，「女性だけでなく，男性も女性性を崇めていて，いいことよね」と肯定的な感想を述べていた。

さらに，季節の祝祭では初めに9人の司祭がそれぞれ9人の女神を呼び出し，最後にお礼を言って帰ってもらうのだが，その9人の司祭の中に必ず1人は男性の司祭がいる。マークがグラストンベリーにいた頃は，彼がこの役割を担うことが多かったのだが，ブダペストに去ってからは，ジョーンズの夫がこの役割を務めることが多くなった。最近では，司祭訓練を終えたジョンが，ジョーンズの夫に加えて司祭を務める様子も見られる。

このようにグラストンベリー女神運動では，男性の参加は排除されるのではなく，むしろ参加者が多く集う場面で，その存在が前面に押し出されて，強調されるのである。

5－2．男性参加者の女神に対する考え方

本節では，男性参加者のライフストーリーから，本稿で取り上げた5人の男性がグラストンベリーでの女神運動に関心をもった背景と女神の捉え方を分析していく。男性が女神に関心をもつ理由としては，ネオペイガニズム，イギリスの固有の神的存在，女性を肯定する姿勢の三点が挙げられる。

まず，女神運動をネオペイガニズムの一つとみている男性がいる。現代の欧米諸国で，数ある新しい宗教的実践の中で，若者は特にネオペイガニズムにひかれているという指摘があるが[Puttick 1997: 246]，ともに20代の若者であるエドとホセの場合，女神カンファレンスに参加したのは，ネオペイガニズムへの関心がきっかけだった。2人はともに，居住地で日常的にネオペイガニズムを実践し，ネオペイガンであることを自覚している。そして，グラストンベリー女神カンファレンスを，女神のみを崇拝する女神運動の一環としてより，むしろ男神だけでなく女神も祝うネオペイガニズムのイベントの一つとして捉えていて，男神を排除し女神のみを祀ろうとする主催者側の思惑とは微妙なずれがある。2人の若者は，「女神のみ」ではなく，「女神を」祀る側面に注目して，女神カンファレンスをネオペイガニズムのイベントと捉えているといえる。また，若者だけでなく，退役軍人のビルも女神はキリスト教の男神キリストと同等の神格的存在だとみていて，女神運動とネオペイガニズムを同一視しているわけではないが，関連があると考えている。

また，ネオペイガニズムではなく，イギリスの神的存在という点にひかれた男性もいる。ジョンはネオペイガニズムを本格的に学んだことはなく，自分をネオペイガンだとは考えていない。そんな彼にとって，イギリス文化に基づいているジョーンズの理論は，ネオペイガニズムの理論より論理的に思えた。男神の崇拝を拒否するマークはジョンと同様にネオペイガンではない。しかし，ジョンとは異なり，マークが女神に関心をもったのは，ジョーンズが本格的に女神運動を始めるようになるずっと前のことだった。彼は，自らに合ったスピリチュアリティを探し求める中で仏教に出会うが，男性的すぎる点だけでなく，自分が育った文化とはあまりにかけ離れた伝統に根ざしていることに違和感を覚えた。その一方で，グラストンベリーと女神を結びつける視点を通して，女神に出会い，女性的な点だけでなく，イングランド的である点に魅力を感じた。ジョンとマークは，ネオペイガニズムというより，イギリス固有の神的存在である点から関心をもったといえる。

さらに，女性の力や性的側面を肯定する姿勢に共感した男性もいる。これまで，女性が女神にひかれるのは，欧米諸国の伝統的な宗教であるキリスト教が否定してきた女性の存在やセクシュアリティを，女神運動が称賛してきたからだと説明されてきた。しかし，マークとビルの事例からは，男性中心的なキリスト教になじめず，女神運動にかかわるようになっていった男性もいることがわかる。女神運動では，女性の身体やセクシュアリティを認めているが，これ

はマークの実体験から得ていた女性理解と同様だった。ビルは，男性中心的なキリスト教に違和感を持ち，英国国教会が女性牧師を認めたことを高く評価していたが，それ以上に女性の力を公に称賛するような女神運動に強い印象を受けたのだった。

ここで挙げた三点はいずれも，男性実践者に特有の理由ではなく，女性実践者の多くも，この三点のいずれか，または複数の理由を背景に，グラストンベリー女神運動にかかわっている。ただし，三点目については，男性実践者にとって，異性の称賛であり，その意味する文脈は女性の場合とは異なっていると考えられる。また，二点目はどの女神運動にも当てはまるわけではないが，一点目と三点目の理由から，女神運動に従事している男性は他の女神運動にもいると思われる。

5－3．女神運動における男性の位置づけ

一般的に女神運動における男性の位置づけとしては，次の三つが考えられる。1）全ての男性を排する，2）男性は参加を認められるが，劣位に置かれる，3）男性は参加を認められるだけでなく，むしろその存在が歓迎される。

1）については，分離主義を唱えたZ. ブダペストのスーザン・B・アンソニー・カヴン・ナンバーワン（Susan B. Anthony Coven No. 1）が挙げられる。フェミニスト魔女でレズビアンのブダペストは，男性を排除した女性だけの共同体を構築しようとする分離主義を唱え，魔女術を純粋な女性の宗教として，フェミニストで分離主義者のレズビアン女性だけに教えた[Salomonsen 2002：38]。彼女は，父権主義が「女性の基本的なオーガズムの本質」を力づくで抑圧してきたと主張し，父権主義を「太母（Great Mother）を抜きにした，男性の性的称賛」を表した侵入だとみている［Greenwood 2000：130]。つまり，ブダペストは，男性が女性のオーガズムを抑圧してきたと批判し，男性を排除して，女性による女性のための新しい共同体の構築を目指したのである。このような女神運動では，男性が女神運動に加わることは難しく，男性実践者はいないと考えられる。

2）については，スターホークの始めたリクレイミング（Reclaiming）を挙げることができる。リクレイミングでは男性の参加を拒んではいないが，男性の存在を否定するような実践がおこなわれることもあった。1984年，ある男性が，リクレイミングのニュースレターに男性のセクシュアリティについての疑問を投げかける投稿をおこなった。この男性がこのような行動をとったのは，彼の11歳になる息子が母親に連れられて，女性だけのリクレイミングの集まりに参加するうちに，「男なんかいらない，いつもはいらない，時にはいてもいいけどね」という歌を覚えて，歌っている姿をみて不安に思ったからである。この投稿をきっかけとして数年にわたり，男性と女神の関係に関する議論がニュースレター上で続いた［Salomonsen 2002：242－243]。その中では男性から男性には男性のためだけの男神が必要だという主張が

なされたり，女性から男神の必要性が訴えられたり，男性から女神のみを崇拝する必要性が述べられたりした。この議論は結局，1989年に創始者のスターホークが著書の中で，女性と男性を，神的存在である女神と男神に直接投影することに疑問を投げかけたことで終焉したのだが，彼女は心理的なレベルでの女性と男性を，それぞれ女神と男神に同一視することを拒否しただけで，生む性と女神のつながりについては否定していないため，出産できる性が女性である限り，男性は周縁的な存在にとどまり続けるとサロモンセンは指摘している［Salomonsen 2002：244］。

本稿で取り上げたグラストンベリー女神運動は，3）に当たる。ジョーンズは，男神を排除し，女神だけを崇拝することを主張するが，女神を崇拝する男性を歓迎し，むしろそのような男性の存在を強調するように季節の祝祭や女神カンファレンスを構成している。このことは，女性参加者に男性でも女神運動の実践者がいることを印象付けるだけでなく，世間的には変人と思われがちな女神運動に関心をもつ男性に，他にもそのような男性がいると示すことで，女神運動を実践していくことに安心感を与えていると想定される。

本稿では，女神運動における男性の位置づけを中心に，グラストンベリーで始まった女神運動を事例として報告してきた。ジョーンズは男神を排除するが男性実践者を歓迎している。そのため，女神に関心をもつ男性もグラストンベリー女神運動にやってくるのだが，男性実践者が女神にひかれる背景にはネオペイガニズム，イギリスの神的存在，女性の力や性的側面を肯定している点への共感も挙げることができる。

6．結　　論

これまでの女神運動に関する研究では，男性参加者の存在はほとんど無視されてきた。その一つの理由としては，女神運動に携わる男性の絶対数が少なく，また実践者であることを公にしていない男性も多いため，インフォーマントを見つけにくいことが挙げられる。プティックは，女性が宗教の中でリーダーになるルートとして，男性創始者の後継者となる，2）男女で創設する，3）女性が創設する，の三つを示したうえで，数少ない3）の事例として，女神のスピリチュアリティを挙げている［Puttick 1997：176, 195］。このように女神運動は女性が主体となって実践している珍しい宗教的実践の一つであり，その中にいる男性は，現代の欧米社会の中ではかなりの少数派なのである。

本稿では，女神運動という欧米で盛んになりつつ運動の実態を，これまで取り上げられてこなかった男性参加者に注目して考察してきた。現代の欧米諸国で盛んになってきている新しい宗教的実践の研究において，女神運動は数少ない女性主導型の宗教的実践という点で重要であり，とりわけその男性実践者は宗教とジェンダーの問題を考えていくうえで興味深い存在であ

る。今後ともその動向を見守っていきたいと考えている。

注

1） 英語で“witch”といえば，女性を指すことが多いが，男性もいる。「魔女＝女性」という連想は，日本語の訳語のイメージからくる問題である。

2） ドルイド教はケルト人の信仰のことであり，その神官はドルイド（Druid）と呼ばれ，歴史的には三つの区分がある［原 2007］。1）前5世紀のガリアのギリシャ文化の影響を受けた知的階層集団，2）紀元前後から近世までのヨーロッパのキリスト教以外の信仰者，3）18世紀以降，アイルランドやグレート・ブリテン島でケルト文化の復興を目指し，キリスト教到来以前の信仰としてのドルイド教を理想視しているネオドルイド，である。現在みられる「ドルイド」は3）にあたるが，三区分のドルイドの歴史的な連続性は学術的には否定されている。

3） 本稿では，基本的には女神運動と記し，引用文献やインタビューについてはその中の記述や発言に従うことにする。なお，実践者やグラストンベリーの住人はこの運動を「女神」とか「女神運動」と呼んでいるが，「女神」では神的存在としての「女神」との区別がつきにくくなることもあり，本稿では「女神運動」と記している。

4） http://www.bc.edu/bc_org/rvp/pubaf/chronicle/v 7 /mr 4 /daly.html,
http://www.bc.edu/bc_org/rvp/pubaf/chronicle/v 7 /my 28/daly.html,
http://www.bc.edu/bc_org/rvp/pubaf/chronicle/v 9 /f 15/daly.html 参照。

5） Tim Ward は，世界各地の女神の聖地を妻とともに訪ね歩き，その体験を綴った著書 *Savage Breast*［2006］を出版した。その中で彼は，女性が女神を崇拝しているのに，なぜ男性はしないのか，男性が女神を拒否するのは，女性との健康的な関係の形成能力が傷つくことを恐れているからではないかと述べている。

6） キリストの大叔父アリマテアのヨセフが，キリストの死後，その血液と体液をもってグラストンベリーを訪れ，この地にイングランドで初めての教会を造ったという伝説。

7） 6世紀頃の伝説的なイングランド南西部の王。サクソン人の侵入からイングランドを守ったといわれるケルト伝説の英雄である。

8） ケルト伝説では，西方に魔法の島アヴァロンという現実的な世界と重なり合った神秘的な世界があり，死者が復活のときを待っているとされる。最後の戦いに敗れたアーサー王は，傷を癒すためにこの島に運ばれ，復活のときを待っているといわれているが，王の遺体と棺がグラストンベリーから見つかったという記録が残っているため，この町はアヴァロンと同一視されている。

9） ヨーロッパ最大の野外ロック・コンサート。「グラストンベリー」の名がついているが，実際にはグラストンベリー近郊のピルトン村で開催されている。地元の農場主が，アメリカ人ギタリストのジミ・ヘンドリクスを追悼する祭典に感化され，同様の催し物を実施したのが始まりだった。現在では，音楽だけでなく，多様な現代芸術の祭典として知られている。

10） 英語の“alternative”には「代替」とか「非体制」という訳語があるが，「オルタナティヴ・コミュニティ」［Prince and Riches 2000］という言葉に代表されるように，主流の単なる否定ではなく，もっと積極的な意味で使われている。また，欧米のヒーリングの研究でも「オルタナティヴ・メディスン」［鈴木 2002］のように，邦訳せずにそのまま用いられているため，本稿でもあえて訳さずにカタカナで「オルタナティヴ」としている。

11)　グラストンベリーを含むイングランド南西部はキリスト教，ユダヤ教，イスラーム，ヒンドゥー教，シーク教，仏教の六大宗教以外の信仰をもつ人の割合が，イングランドとウェールズの中で最も高い［Census 2001］。

12)　1972年に長老派教会と会衆派教会が合併して成立したプロテスタント教会。通称URC。

13)　もともとはシリア正教会の流れを汲む西欧独自の正教会。1866年に，シリア正教会の聖職者がイギリスにやってきて，独自の正教会を設立した。当初はその存続も危ぶまれたが，徐々に信者を増やし，1994年にはエジプトのコプト正教会の一員となり，ブリテン正教会という称号を賜った。詳しくは［http://www.britishorthodox.org/］参照。しかし，グラストンベリーの教会は未だに「ケルト正教会」と名乗っている。特定の信者はいなくて，神父が一般住宅を借りて，礼拝の場所をつくり，1人でミサをおこなっていたが，この礼拝所は2008年の夏には閉鎖され，2009年4月現在，神父が自宅でミサを行っている。

14)　現在グラストンベリーには，ナクシャバンディ派スーフィのグループが二つある。一方のシャイフはキプロス人で，もう一方はイギリス人である。どちらも欧米人の信者が多いことで知られる。詳しくは［Draper 2004］参照。

15)　インド人プラブパーダが始めたヒンドゥー教の一派でハレ・クリシュナ運動としても知られる。1966年にアメリカで協会を設立したため，欧米に信者が多い。詳しくは［Puttick 1997: 17-18］参照。

16)　1967年にイギリス人の僧侶サンガラクシタが創設した仏教の団体。伝統的な仏教の価値観に忠実に，新しく西洋人に合った形の仏教の創造をめざしている。西洋社会を中心に世界23ヶ国に支部がある。詳しくは［http://www.fwbo.org/index.html］参照。

17)　アメリカ人ヒズ・ホリネスが1994年頃から始めた，チベット仏教とキリスト教の混合した宗教。彼はイエス・キリストと仏陀の生まれ変わりだとみなされている。

18)　創始者は自分が始めた女神運動を，女神運動のある団体を形成しているのではなく，単にグラストンベリーで活動している女神運動で，女神運動全体の流れの中の連続した一部であると捉えている。そのため，一連の活動の中心的人物は創始者だが，活動を包括する団体としての名称はない。しかし，本女神運動の一部の実践者や外部の人々は，この女神運動を，ある一つの女神運動だとみなしているので，本稿では便宜上「グラストンベリー女神運動」と呼んでいる。

19)　このヒーリングでは，感情が魂のエネルギーの流れを阻害することで病気になると考えられていて，手かざしによって，エネルギーの流れを改善しようとする。

20)　一般的に“Temple”は「寺院」と訳すが，この場所は小さな部屋であり，ここを訪れた複数の日本人から「寺院」より「神殿」と訳すほうが雰囲気に合っているという意見を頂いた。筆者もその意見に賛成する立場なので，あえて「女神神殿」と訳している。

21)　地形を何らかの形にみたて，そこに神秘的な意味をみいだすことは，この地域では先例がある。グラストンベリー一帯の地形を空の十二宮（Zodiac）とみなしたり，トール（Tor）という丘を三次元の迷宮だとみなしたりする［Lonegren 2007（1991）; Maltwood 1982（1929)］。ジョーンズの見いだした地形と女神の結びつきもその一つだといえる。

22)「輪」とは8方角を四季や4要素に対応させた円である。輪に相当するものは様々な文化でみられるが，欧米諸国では古代ケルト人の「年の輪（The Wheel of the Year)」とネイティヴ・アメリカンの「聖なる輪（Medicine Wheel)」が有名である。古代ケルト人は1年間を八つの季節に分けた暦を使っていたといわれ，この八つの季節を円上にあらわしたものが「年の輪」であり，春夏秋冬の四季は，それぞれ東南西北の4方角と風火水地の4要素に対応すると考えられ

ていた。このようなケルト文化の「年の輪」はネオペイガンにはよく知られていて，彼らはこの「年の輪」に沿って季節の祝福の儀式をおこなう。また，「聖なる輪」の方角と色の対応は，部族によって異なるが，例えばラコタ・スー族では，東－黄，南－白，西－黒，北－赤となっている[阿部 2006：89－91]。ジョーンズも「聖なる輪」とケルトの伝説に共通点を見いだしたことをきっかけに，ブリタニアの輪の考案を試みた。

23） 1ポンドは，2008年8月では約210円，経済危機後の2009年4月では約150円。

24） スコットランド合同自由教会は，もともとは1900年にスコットランド自由教会（Free Church of Scotland）と合同長老派スコットランド教会（United Presbyterian Church of Scotland）が一緒になって形成されたスコットランドの長老制の宗派である。しかし，1929年にスコットランド教会（(Church of Scotland)）に合同することになり，それを拒否した少数派によって再発足したのが現在のスコットランド合同自由教会である。

25） 女神カンファレンスの一部のワークショップは女性に限定されているが，男性に限定されたワークショップもあるため，この限定が男性を排除しているとは一概にはいえない。

参考文献

青山吉信　1992 『グラストンベリ修道院　歴史と伝説』山川出版社。

阿部珠理　2006 『大地の声　アメリカ先住民の知恵のことば』大修館書店。

ギンブタス，M.　1989 『古ヨーロッパの神々』鶴岡真弓訳，言叢社。（M. Gimbutas, 1981, *The Goddesses and Gods of Old Europe: 6500–3500B. C. Myths and Cult Images*. London: Thames and Hudson Ltd.）

小松加代子　2006 「女神神学とフェミニスト神学の対話は何を示すのか　ローズマリー・R・リューサー著『女神と聖なる女性性』をめぐって」『湘南国際女子短期大学紀要』14，31－46。

小松加代子　2007 「女神信仰」田中雅一・川橋範子編『ジェンダーで学ぶ宗教学』世界思想社，166－182。

佐伯順子　1998 「女神を求めてーアメリカにおける「女性の霊性」運動と日本」田中雅一編『女神　聖と性の人類学』平凡社，357－389。

鈴木七美　2002 『癒しの歴史人類学　ハーブと水のシンボリズムへ』世界思想社。

スターホーク　1994 『聖魔女術』鏡リュウジ・北川達夫訳，国書刊行会。（Starhawk, 1979, *The Spiral Dance: A Rebirth of the Ancient Religion of the Great Goddess*. San Francisco: Harper San Francisco.）

田中雅一　1998 「女神研究序論」『女神　聖と性の人類学』，田中雅一編，平凡社，5－28。

原聖　2007 『興亡の世界史07　ケルトの水脈』講談社。

リューサー，R. R.　1996 『性差別と神の語りかけ』小桧山ルイ訳，新教出版社。（R. R. Ruether, 1983, *Sexism and God–Talk: Toward a Feminist Theology*. Boston: Beacon.）

BBC（British Broadcasting Corporation，英国放送協会）
http://www.bbc.co.uk/somerset/content/image_galleries/glastonbury_goddess_conference_2006_gallery.shtml?1（2006年8月アクセス）.

Bowman, M.　2005 "Ancient Avalon, New Jerusalem, Heart Chakra of Planet Earth: The Local and the Global in Glastonbury." *Numen* 52: 157－190.

British Orthodox Church http : //www.britishorthodox.org/（2008年12月アクセス）.

Boston College website

http : //www.bc.edu/bc_org/rvp/pubaf/chronicle/v 7 /mr 4 /daly.html,

http : //www.bc.edu/bc_org/rvp/pubaf/chronicle/v 7 /my 28/daly.html,

http : //www.bc.edu/bc_org/rvp/pubaf/chronicle/v 9 /f 15/daly.html

（2009年4月アクセス）.

Budapest, Z.　1989　*The Holy Book of Women's Mysteries*. Oakland : Wingbow Press.

Census　2001　Somerset Interactive Area Profiles Towns Homepage http : //www.somerset.gov.uk/somerset/statics（2008年9月アクセス）.

Christ, C. P. and J. Plaskow（eds.）1979 *Womanspirit Rising : A Feminist Reader in Religion*. San Francisco : Harper & Row.（キャロル・クライスト，ジュディス・プラスカウ編　1982『女性解放とキリスト教』奥田暁子，岩田澄江訳，新教出版社。）

Daly, M.　1978　*Gyn/ Ecology : The metaethics of radical feminism*. Boston : Beacon.

Draper, I. K. B.　2004　"From Celts to Kaaba : Sufism in Glastonbury." in D. Westerlund（ed.），*Sufism in Europe and North America*. New York and London : Routledge, 144 – 156.

Eller, C.　1995（1993）　*Living in the Lap of the Goddess : The Feminist Spirituality Movement in America*. Boston : Beacon.

The Friends of the Western Buddhist Order homepage

http : //www.fwbo.org/index.html（2009年4月アクセス）.

Gordon, R.　1995　"Earth star magic : A feminist theoretical perspective on the way of the witches and the path to the Goddess." *Social Alternatives* 14.

Greenwood, S.　2000　*Magic, Witchcraft and the Other World*. Oxford : Berg.

Griffin, W.　2000　"Introduction." in W. Griffin（ed.）*Daughters of the Goddess : Studies of Identity, Healing, and Empowerment*. Lanham : Roman & Littlefield, 13 – 22.

Hutton, R.　1999　*The triumph of the moon : a history of modern pagan witchcraft*. Delhi : Oxford University Press.

Jones, K.　1996　*On Finding Treasure : Mystery Plays of the Goddess*. Glastonbury : Ariadne Publications.

Jones, K.　2000　*In the Nature of Avalon*. Glastonbury : Ariadne Publications.

Jones, K.　2001（1991）　*The Ancient British Goddess*. Glastonbury : Ariadne Publications.

Jones, K.　2006　*Priestess of Avalon Priestess of the Goddess*. Glastonbury : Ariadne Publications.

Lonegren, S.　2007（1991）　*labyrinths : ancient myths and modern uses*. Glastonbury : Gothic Image.

Maltwood, K. E.　1982（1929）　*Glastonbury's temple of the stars*. Cambridge : James Clarke & Co.

Prince, R. and D. Riches　2000　*The New Age in Glastonbury : The Construction of Religious Movements*. New York : Berghan Books.

Puttick, E.　1997　*Women in New Religion : in search of community, sexuality and spiritual power*. New York : St. Martin's Press.

Rountree, K.　2004　*Embracing the witch and the goddess : feminist ritual-makers in New*

Zealand. London and New York : Routledge.

Salomonsen, J. 2002 *Enchanted feminism : ritual, gender and divinity among the Reclaiming witches of San Francisco*. London and New York : Routledge.

Ward, T. 2006 *Savage Breast-one Man's Search for the Goddess* Winchester and New York : O Books.

要　旨

これまでの宗教研究では，男性中心的な視点から研究がなされてきたことを反省し，男性中心の宗教における女性信者に注目することの必要性は叫ばれてきたが，女性中心の宗教にかかわる男性信者の研究はほとんどおこなわれてこなかった。その主な理由としては，女性中心の宗教的実践の数が少なかったことが挙げられる。主流の宗教が提供してこなかった事柄を女性に提供してきたため，女性をひきつけてきた新しい宗教的実践であっても，指導者が男性だったり，女性指導者を操る男性がいたりして，必ずしも女性主導型ではなかったのである。

1970年代，フェミニストのネオペイガニズムへの接近から生まれた現代の女神運動は，女性が主体となって実践している数少ない宗教的実践である。女神運動の実践者の大半は女性であるが，男性実践者も少数ながら存在している。女神運動における男性の位置づけとしては，1）排除される，2）劣位に置かれる，3）歓迎される，の三つが考えられるが，ニューエイジの聖地として知られる，イギリスのグラストンベリーで1990年代に始まった女神運動は3）にあたる。この女神運動では，男神は排除するが，女神を崇拝する男性は歓迎するという姿勢をとっているため，他の女神運動のグループと比べると，男性の割合が比較的多い。本稿では，グラストンベリーにおける女神運動の創始者のライフストーリーとその主張，およびこの女神運動にかかわりをもった5人の男性実践者のライフストーリーを分析した。その結果，男性がこの女神運動に関心をもった背景には，ネオペイガニズム，イギリスの固有の神的存在，女性の力や性的側面の肯定があったことがわかった。

本稿は，欧米の新しい宗教的実践におけるジェンダー研究の一つである。と同時に現代の欧米で盛んになりつつあるもの，日本ではその存在がほとんど知られていない女神運動の詳細についても明らかにすることを目指している。

キーワード：オルタナティヴ宗教，女神運動，フェミニズム，ネオペイガニズム，男性と女神

Summary

In the area of religious studies, scholars have focused on female believers of male-oriented religions, but they have rarely studied male believers of female-oriented religions. The main reason is that there are few female-oriented religions. While the teaching of new religions is women-friendly, the leadership is often male dominated even though the followers are female.

The contemporary Goddess movement first appeared in the 1970 s when feminists adopted the Goddess or witch from the Neopaganism, as a symbol of strong women. The Goddess movement is one of the rare new religions whose leadership and organisers are women in general, while there are some male believers.

The Goddess movement in Glastonbury, England started in the 1990's. In this particular Goddess movement, God is rejected, yet male followers are particularly welcome. So there are more male believers in this Goddess movement than in any other. In this paper, I examined the life story and the teaching of the female founder and the life stories of five men who have been involved in this Goddess movement at some point. I discovered that the reasons why those men were interested in this Goddess movement included Neopaganism, English divines, and their positive attitude toward women's power and sexuality.